

平成 28 年 9 月 26 日 弘前市長室にて

葛西憲之弘前市長

三上千春公益社団法人弘前コンベンション協会会長

ポイント

- ◎人に任せるのではなく、仕組みに任せて持続的に行う
- ◎市の動きが刺激になり、様々な活動、事業が生まれる
- ◎市民がプレーヤーとなるまちづくり、観光が大きな役割を果たす
- ◎歴史的風致をひたすら守るのではなく、攻めることが大事
- ◎情報発信を続け、それが市民の活力や誇りにつながる良い循環をつくる
- ◎新しい動きは、まず受け入れる
- ◎自分の子どもたちを『ねぶた』に参加させたいと戻ってくる、それが地域の祭りの意味

聞き手) 平成 20 年に歴史まちづくり法ができて、今年が 8 年目です。この間 60 近くの市町村で取り組みが進められ、地方自治体にとって魅力あるプロジェクトとなっているように見受けられます。私から見て、これらの取り組みには、二つの特徴を感じています。一点は他の都市計画のプロジェクトに比べて、市長のトップダウンの傾向が強いことです。どのまちでも取り組みの前面に市町村長が出てきていますし、歴史まちづくりサミットもその現れの一つです。もう一点はその逆で、地域の人への参加が積極的になされていることです。これには法律の仕組みとして、歴史的風致維持向上計画を策定する際に地域の人々の活動を組み入れていくことが必須で、行政だけではできない仕組みになっていることも背景にあると思います。実際に計画策定の協議会などで伝統産業に従事されている方などと意見交換をしながらプランを練っています。トップダウンの強いリーダーシップの下で、地域の積極的な参加によって進められているというのが、歴史まちづくり計画の特色ではないかと思っています。そこで、トップダウンの責任者である市長がどのような思いで取り組みを始められたかなどについて、直接そのお考えを伺うとともに、民間の方々が市長の思いにどう応えられてきたかもお聞きし、その結果を全国の自治体にお伝えしたいと考えました。その第一号として、最先端を進んでいる弘前市の葛西憲之市長にお願いいたしました。ぜひとも、市長の思いを聞かせていただきたいと思います。

1. 歴まちに取り組んだ動機

聞き手) もともと弘前市では、重要伝統的建造物群保存地区等、文化財の施策に取り組まれていたが、歴まち法ができて早い段階で着手された動機をお聞かせください。

市長) 歴まちという法律自体に興味があった。文化庁と国土交通省が手を結んだという前提が極めてドラマチックで、こんな法律ができるなどとは考えもしなかった。この仕組みであれば地域の持つ財産

が活用できる、命を与えていくことができるという思い、なぜかといえ
ば、県庁時代に三内丸山遺跡を担当し、あそこに野球場を作ろうとして
進めていたが、最終的に遺跡を残すことになった。文化庁、国土交通省、
県土整備部と教育委員会の連携がうまくいかなかった経験がある。とこ
ろが、歴まち法ができて文化財をまちづくりに活用できるという状況は
青天の霹靂であった。活用しない手はない。弘前には弘前城、明治大正
の建築、前川國男の建築もある、これを活用すればまちづくりの取り組
みを内外に知らせることができる。またソフト事業ではお祭りまで支援
可能という整理だった。それだけの財産を持っている弘前市だから、費
用のかかる改修は極めて厳しい状況だったが、改修にも支援が活用でき
るということもあり、東北で最初の歴まち指定に着手した。それまでの
私の思いがこの中で実現したといってもよい。



葛西憲之弘前市長

2. 市長部局と教育委員会の調整について

聞き手) 国で立法作業を始めるときは、文化庁と国交省都市局の幹部が懇談するところから始めました。

文化庁にとって国土交通省は敵役でもありましたが、お互いに自分たちだけではできないという思い
もあり、話を進めるうちにだんだんうまくいくようになりました。弘前市では、通常は風通しが良く
ない市長部局と教育委員会との調整に何か気を使った点がありますか。

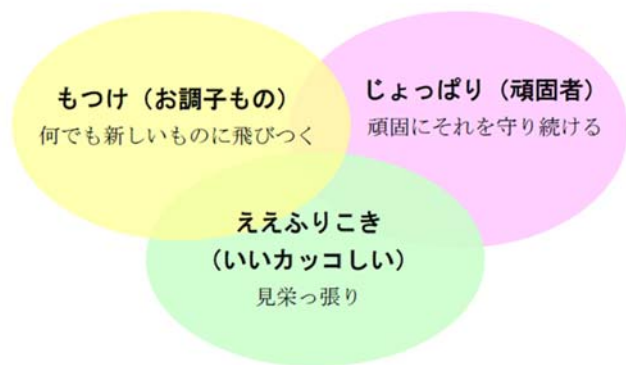
市長) 格別な工夫はありません。文化財を活用しようということは私が言ってかなり浸透してきた。活用
しない手はないでしょという、最初は教育委員会に抵抗感があったが、次々に宿題を出すとそのう
ちの少しはやらないといけなくなる。小さい自治体では担当者とコミュニケーションが取れる。教育
委員会の側も拒絶反応は起らなかった。三内丸山ときは、考古学者や民俗学者との対応を県土整備
部という技術系の職員で運営した経験がある。良い方向に遺跡を整備しますという教育委員会とコミ
ュニケーションをとりながらまとめた。

聞き手) その壁を取り払うのが一番難しいと聞いています。他の都市では教育委員会のキュレーター
を都市計画の責任者に据えるというような人事もやっていたようですが。

市長) 人事交流はやらなかった。ただ弘前市には
公園緑地協会（みどりの協会）があり、ここが
重要な役割を果たしている。みどりの協会と市
の公園緑地課が同じ職場で、文化財の部局とも
行き来があったという素地があった。

もともと弘前の気質として「じょっぱり」（頑固者）と「もつけ」（お調子もの）と「ええふりこ
き」（いいカッコしい）がある。藩政時代の神社
仏閣も明治の建築も昭和の前川建築も、じょっ
ぱり精神でこれを残そうと努力してきた。そう
いう気質が残っているので、資産が残ってきた
しこれからも残していく。

津軽の気質が弘前のまちを育てる



じょっぱり、もつけ、ええふりこき

ただし、弘前公園の管理だけでも2億7千万円もかかるので、気質だけに任せるのではなく、仕組みとしてしっかり組んでいかないといけない。ここは人に任せるのではなく仕組みに任せること、そして持続的に行われることが重要だと思う。人だけに任せるのではそのうち破たんする。教育委員会や土木部といった組織体でやっていかないといけない。はじめはトップダウンでやった。しかし続けていくためには仕組みがなければいけない。

3. 住民の方、民間の事業者との関係、気を遣ったこと、働きかけは

市長) 伝建地区が一つのキーポイント、そこでの説明はしっかりした。もともと伝建地区という制限がかかっていたので、電線地中化と消流雪溝、石畳風舗装を合わせて整備するという約束をしたので、受け入れは問題なくいった。祭りの関係者は伝統的な祭りは守っていこうという姿勢で、こちらは歴史的風致の中に祭りを加えていこうという方向だったので、むしろ歓迎され、苦勞することはなかった。

聞き手) 伝建地区は30年間取り組んできて今の姿になりました。前はボロボロの建物だったというお話を聞いてきたばかりです。指定された時と今と比べてどうでしょうか。

市長) 昔の伝建地区のイメージは、電線が立ち並んでいて美観というものがない状態だった。しかし今は、生垣の整備もしっかりやってくれるようになったし、黒塀などもちゃんとやってくれる。武家住宅も3軒しかなかったのを1軒復元している。伝建の中の武家屋敷で飲食ができるように条例も変えた。そういうのが好感を持って迎えられる。伝統の古武道や尺八のイベントを行うことによって、利活用が見えてくる。それで地域の人たちも違った視点になってくる。それに合わせてハード整備が進むと、伝建地区に住んでいるという誇りが生まれてくる。伝建地区を活用するという視点が必要である。

聞き手) では、民間の立場として三上会長にお伺いします。歴まちの取り組みにいつから参加していますか。

三上会長) 平成21年の最初から参加している。施設が保存できる、お祭りにも使えるというのが魅力。サラリーマン化してお祭りに参加する人が少なくなっている、お金も少なくなっている。そういうところにお金を使えるというありがたい話だったのも魅力だった。

聞き手) 歴史を残して町のメインの魅力にしようという取り組みの民間としての感想はいかがですか。

三上会長) 産業のメインがリングなので、後の産業は観光しかない。地元に住んでいると気づかないものがある。築城400年がきっかけで、地元の人が弘前はすごいと再認識した。市長が曳屋をやって、弘前にお客さんが多く入るようになった。弘前の何が売りかといえば歴史がある町、禅林街のようにお寺がいっぱい並ぶまちも話を聞けば全国的にないそうだし、いろんなことを整備して売りになる要素が沢山ある。それを市長が沢山進めてくれるので、それが「刺激」になり、それに追いつき追い越せと様々な商売、様々な活動が生まれてきている。地域振興のためになっている。飲食とかそういう分野で新規起業が多くなっている。自分でやってみようものの考え方が変わってきている。



三上千春会長

市長) 例えば、CSV活動の一つとして「白神めぐみ寿司」という取り組みをJTBと一緒にやっている。弘前は海がないので深浦、鯨ヶ沢など周辺の町村で獲れた白神山地の恵みを受けた魚を直送して、おいしい料理を提供している。(CSV: Creating Shared Value : 共通価値の創造)



弘前城曳屋の広告効果は約25億円!

4. 地域創生、観光振興における歴まちの役割

市長) 観光面で言うと、今の潮流は団体客から個人客にシフトしてきている。何を客が求めるかという
と、お城の文化だったり神社仏閣だったり、そちらの方向に目が向いているのは間違いない。一つは生活文化に目を向けるということ。観光客と地域の住民が出会い、ふれあい共感し、感動を共有することがこれからの観光だろう。生活文化の中に歴史的文化が根を張ってバックボーンになっている。市民が持つまちへの誇りがもてなしにも表れる。お客様と地域の交流で、生活文化に触れるというのが至上の喜びになる。

生活文化というのは、例えば市場に一番よく表れる。土足で市民の家には入れないが、市場では来ている市民と触れ合える。また、まちというのは歴史文化を大事にしてきたがゆえにラビリンスみたいなものを持っている。地図に描けないまちは先に何があるかわからない、ある種の猥雑さが必要で、それが魅力になってくる。そこでガイドが必要になる。弘前発祥の「路地裏探偵団」は函館にも輸出されている。路地裏を行けば必ず人と触れ合うわけで、観光的な要素として大切。

三上会長) 最近、大人の休日クラブを利用して団体よりは個人で来る。山歩きも個人で来る。家族で来る客も多い。以前は四大祭り以外の期間は人が来なかったが、今は切れ目なく人が来るようになっている。何を見に来ているのかと考えると、洋館だったりお寺だったり、ゆっくり見ておいしいものを食べて、路地裏探偵団に参加したり、自転車に乗って楽しんでいるお客さんが多い。ディズニーランドみたいに派手なところはないが、いいお客さんが増えてきている。海外の客もリンゴもぎに行ったりしている。団体の予約も相当入っている。公園の中にはお姫様とお殿様の写真を撮るのもあるし、浴衣で街歩きするところもあるし、そういったものが意外と人気がある。民間の人が十分な商売にはならず、給料は取れないかもしれないが、自分たちも楽しんでお客さんにも楽しんでほしいとやっている。五所川原から大館、函館や八戸など、面白いところを探そうという街歩きも広がっている。



歴史的風致と現代の融合!

市長) 弘前はまち歩き先進地で、トップセミナーもやり、中南津軽まちあるき博覧会も開催された。ガイド団体が「観光ボランティアガイド」(市長もメンバー)、「路地裏探偵団」、「エスコートガイド」という女性専門にスイーツなどを案内する団体、「たびすけ」という身体障がい者を案内する団体と4つある。

また、市が率先してハイカラ庭園などいろんな取り組みを打ち出すと市民も反応してくれる。それに応えようと自然に若者が育つ。市民がプレーヤーとなるまちづくり、プレーヤーとなる観光が大きな役割を果たす。行政だけでなく、若者たちが敏感に反応して自ら行動を起こしてくれること、それと歴史風致がうまくかみ合う取り組みにしていきたい。

5. 広域観光ルート、世界への展開について

市長) 広域観光は重要。官民連携と地域間連携と施策間連携の3つの連携なくしては、これからの資金の出どころはないと考え、連携強化に努めている。弘前圏域定住自立圏の枠組みの8自治体、函館、弘前、青森、八戸の青函4都市観光都市という連携、特に函館との連携。桜つながりでは弘前と角館と北上の東北三大桜名所、お城つながりでは現存12天守をPRする取り組みを全国12都市でやっている。また、新たに前川國男の近代建築つながりがスタートする。さらに桜という点で言えばお城と桜はつきもので、弘前には桜守^{さくらもり}という樹木医の仕組みがありこれを売り込んでいきたい。全国のお城から結構オファーが来ており、先般は姫路城まで行って指導してきた。国際的には武漢の桜は弘前から技術輸出したもので、そういう縁もあって武漢に1万本の桜園ができています。いずれはワシントンDCの河畔と併せた世界三大桜の、桜守としたい。このように歴史風致をひたすら守るのではなく、攻めることが大事だ。

シティプロモーションとして、市民一人ひとりがまちをデザインするクリエイターとして参画する弘前デザインウィークはクリエイターをこれから育てていきたいと思います、市民みんながまちづくりに一体となってまちを盛り上げていきたいと思います、いろんな人たちとコラボしながら、弘前の物産、津軽塗などの伝統工芸を、デザイン力で磨き上げてブランディングしながら、全国そして世界へ出ましようということで、来年の1月のパリの見本市に試作品を出す。そのあとはミラノで本格的にデビューという取り組みを進めている。新しい切り口でのデザイナー、クリエイターが弘前のまちを応援してくれる、弘前自体の地域のクリエイターが沢山育っていく状況の中でいろんなものが生まれてくる。それが弘前デザインウィークの最も大事な点で、人材育成と新しいプロダクト、新しい観光コンテンツ、新しいイベント、それを世界に発信する。その中で注目される歴史的風致が浮かび上がってくると思っている。

聞き手) 魅力があるから新しい人も来るということですね。



弘前城と岩木山

6. 他の都市へのアドバイス

聞き手) 東北の外の市町の歴まちの取り組みへの助言はありますか。これほど素材が集まっていないところもある。ソフト面や市民の方の参画、協働などについてはどうでしょうか。

市長) どの町村にも一つや二つ必ず成長戦略につながるものはある。それをまずベースにする。そこから波及して、次の展開を考えていかないといけない。大事にしながら新しいものを作っていくこと。一つは今まである財産は財産としてそれをさらに磨き上げて新しい価値を創造していくことが一つ。同時に我々の世代で新しい「もの」、「こと」、「ひと」、これを積み上げていくこと。そこで一番大事なのは人。人材育成があつて、そういう人たちが市民を巻き込んで取組みを進化、成長させていくことを続けること。骨が折れることだが、いつも情報発信し続けると、市民の側もこうしては
いられないという思いになってくる。それが活力になり、それが誇りになっていくという、良い循環
を作っていくこと、それがないと長続きしない。行政はそれなりの覚悟をもって続けていかないといけない。それを育てていくための仕掛け方が常に求められている。そのことに気づきながら、仕事をやり遂げるような人材を、役所の側でも育てていかないといけないということ。それができていくと、確実に民間側もそれに応えてくれる状況が生まれてくる。いろんなことができていくようになる。

聞き手) 歴史をきっかけに若者が来たということは本当に勉強になります。テレビでダンスのまちを放映していたのを見ましたが、そういう人を日常的に巻き込んでいくためのポイントは何ですか。

市長) 新しい動きは、まず受け入れることで
す。入口で拒絶反応を起こすと、行政は
何もしてくれないというような世界にな
ってくる。そこで行政はまず受け入れる。
もちろん玉石混交あるが、その中からじっくり選んでいく。行政はまず見てくれているなというイメージを、プレーヤーの側にしっかりと意識させる。意識共有されれば、そこから信頼関係が始まる。だ



だから何かあれば私が自分で出かけて行って、挨拶して、声をかけるようにしている。それがあって初めて、市の側もやる気があるみたいだと感じてくれる。そこがないと始まらない。だから首長は大事、そういうことを課していくと忙しくなり、首が回らなくなる。だから、やめるものはやめないといけません。行政が肥大化してまわらなくなるといけないので、期限を区切ってうまくいかないものは止めるなど、取捨選択する精神が必要。いったん引き受けると止めるのは難しいが、それをやり遂げるのもやっぱり人、プレーヤーを育てていかない限りまちに元気が出ない。私は「子どもたちの笑顔あふれるまち弘前」といっているが、そのフレーズはまさに、子どもたちの笑顔というのは我々の心を温めてくれる。そういう笑顔がまちの隅々までいきわたっているということは、そのまちの末端神経まで意識が



弘前ねぶたまつり

届いているということ、まちの誇りや活力を映す鏡だと思っている。だから「子どもたちの笑顔あふれるまち弘前」と言っている。人を大事にしていきましょう、人が常に生まれ続ける、その人がまた次の人を育てていく。弘前のねぶたまつりは、青森の企業のねぶたとは違って、市民がやるのです。町会を出している。お金もそんなにないが、かける意気込みは全然変わっていない。今でも80台以上ねぶたが出ており、台数は変わっていない。五所川原市の立佞武多には23mと高さで負けても、数では弘前が絶対負けていない。まつりに参加した子どもたちが、大人になり、彼らがどこか出かけていっても、どこかに就職してもまた帰ってくる。自分の子どもたちには「ねぶた」に参加させてやりたいと戻ってくる。それこそが地域で作っていくまつりだと思っている。誇りを持ち続けるために、まつりのバックボーンが必要。そういう意味で岩木地区で「日本で最も美しい村」連合へ加盟した。岩木地区だけで加盟する。そういう取り組みで地域の誇りが生まれる。

聞き手) ありがとうございます。

聞き手：

筒井智紀 国土交通省東北地方整備局建政部長

舟引敏明 宮城大学事業構想学部教授

佐々木秀之 宮城大学事業構想学部准教授